

[Original Paper]

## **An analysis of students' reports on the course "Basic Nursing Practice I", no. 2 : Learning outcomes related to qualities requisite for the nursing profession**

Tomomi Tsujino\*, Tomoko Yamaguchi\*, Noriko Ueno\*, Takumi Ogata\* and Masako Yano\*

\* Aino University

### **Abstract**

The purpose of this study is to examine how students acquire qualities requisite for the nursing profession through basic nursing practice. We have analyzed the reports submitted by 57 students. As a result, 153 codes have been extracted and classified into 5 categories: "skillfulness", "emotionality", "relationships", "autonomy" and "others". Since the objective of this training is to communicate with patients, students have learned a lot of things about "relationships" and "emotionality". Through this training, students have actually engaged in medical services and interacted with patients. This is not a type of learning experienced through lectures. Based on the report contents, we suggest that this training, through direct experience of nursing, has provided students with an opportunity of reflecting how successful their relationships have been.

**Key words** : qualities requisite for nursing profession in nursing students, the early exposure, nursing students, basic nursing education

## 初回基礎看護学実習レポートの分析（その2）

——看護職者としての資質に関連した学び——

辻野 朋美\*, 山口 智子\*, 上野 範子\*  
緒方 巧\*, 矢野 正子\*

**【要旨】** 本研究の目的は、学生が初回基礎看護学実習のどのような経験から、看護職者として必要な資質を身に付けていくのかを明らかにすることである。

57名の基礎看護学実習終了後に記載したレポートの内容を分析した。その結果、153個の学びが抽出され、【技能性】、【情緒性】、【関係性】、【主体性】、【その他】の5個のカテゴリーに分類された。本実習が受け持ち患者とのコミュニケーションを主体とした実習であったため、【関係性】や【情緒性】に関する学びが多かった。

本実習で、実際に患者と関わり、医療の現場に身を置くことによって経験したことは、講義では得られない経験である。初めて看護という職業に触れることで、自らの関係性のありようを振り返る機会となっていたことが記述内容から推測された。

**キーワード：**看護職者としての資質、早期体験学習、看護学生、看護基礎教育

### I はじめに

患者の権利意識の向上や医療サービスへの要望の変化、福祉・介護を含む医療体制の変革など、わが国の医療を取り巻く社会の状況は著しく変化している。より安全で質の高い医療・看護への要請から、看護学の人材育成における国民のニーズや期待は高まっているといえよう。これらの要請に対応すべく、看護基礎教育は、豊かな人間性を兼ね備えた資質の高い看護職者の育成が問われている。看護を生涯教育ととらえるならば、看護基礎教育は、看護職の資格を得るための教育ではなく、将来変化する看護の役割を引き受け、看護の本質を追及していけるような基礎的能力を引き出すことであろう。したがって、看護基礎教育において

は、将来の看護の発展に寄与することのできる、看護職者に求められる資質の育成を目標とし教育活動を行っていくことが望ましい。そのためにも、各大学において、教育全般の質の向上や学生の学習成果の向上を目的に、教育方法を検討し、評価、還元させていくことは非常に重要である。

我々は、2005年に看護職者に必要とされる能力を評価する指標として、【技能性】、【情緒性】、【主体性】、【関係性】の4つのカテゴリーで構成された「看護学生の看護職者としての資質」の調査票を作成した<sup>1)</sup>。この調査票を用いて、基礎看護学実習や学年修了時に、学生の自己評価を縦断的に行ってきた。そして、調査結果をもとに、講義・演習の方法や基礎看護学実習の目標や内容等を検討してきた。

\* 藍野大学

これまでの調査で、1年修了時の調査項目全体の平均値が高いことを報告した<sup>1)</sup>。その中でも、【情緒性】に関する項目は、看護師として人と接する時の自分の情緒的反応や対応などを含んでおり、【関係性】に関する項目は、他者との関係を保つためのコミュニケーションスキルやリーダーシップ、メンバーシップなどの組織活動の役割遂行に関する質問項目を含んでいる。この【情緒性】と【関係性】の平均値が1年修了時に高かった要因に、早期体験学習（Early Exposure）として1年次の7月に1週間実施した、基礎看護学実習Ⅰの効果が示唆された<sup>1)</sup>。

しかし、我々がこれまで実施してきた質問紙調査では、学生が基礎看護学における講義・演習、実習のどのような場面のどのような経験・体験から、看護職者として必要な資質を獲得していくのかを明確にはできなかった。前述した研究の中でも学生の体験を質的に検討し、明らかにしていく必要性を述べてきた。

以上の研究背景をふまえ、本研究では、基礎看護学実習後に記載するレポートを分析し、どのような場面のどのような経験・体験から「看護学生の看護職者としての資質」に関連する学びを得ているのか質的に分析し、明らかにする。また、早期体験学習の効果について検討したのでここに報告する。

## Ⅱ 研究目的

基礎看護学実習後に記載するレポートを分析し、どのような場面で「看護学生の看護職者としての資質」に関連する学びを得ているのかを明らかにする。

## Ⅲ 研究方法

### 1. 研究対象

#### 1) 研究対象者

関西圏内にある看護系大学の基礎看護学実習Ⅰを履修した1年生のうち、課題レポートを研究に使用することに了解した学生

#### 2) 分析対象

実習終了後に記載する課題レポート（以下レポートとする）。

課題レポートとは、実習目的・目標・行動目標に照らし合わせながら、実習中に学んだ中でテーマをあげ、学びの内容・評価・考察・まとめ等を記載したものである。

#### 3) 対象学生が履修した基礎看護学実習Ⅰの内容（表

表1 対象学生が履修した基礎看護学実習Ⅰの内容

<p><b>【目的】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 対象者に対して適切な医療・療養生活を提供するという観点から、病院の地域における位置づけと役割、病院組織・機能、看護師の役割を知る</li> <li>2. 健康障害を持ち入院生活を送っている対象者の理解と、相手を尊重した態度で日常生活の援助を行う</li> </ol> <p><b>【目標】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 病院の機能・役割を知る</li> <li>2. 対象者のおかれている病室・病床環境を理解できる</li> <li>3. 対象者及び看護師とコミュニケーションをとることができる</li> <li>4. 健康障害及び入院・治療による、対象者の生活行動の変化を知る</li> <li>5. バイタルサインの観察ができる</li> <li>6. 実際に行われている日常生活援助の必要性や方法、その援助の科学的根拠を知る</li> <li>7. 看護師に報告し、記録することができる</li> <li>8. 看護師の役割を知る</li> </ol> <p><b>【内容】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 実習単位：1単位（45時間）</li> <li>2. 実習期間：2006年7月10日（月）～7月14日（金）（7月12日（水）は学内実習）</li> </ol>
---

#### 1)

#### 4) 対象学生の基礎看護学実習Ⅰ履修時のレディネス（表2）

### 2. 分析方法

#### 1) 分析方法

レポートの内容を、「看護学生の看護職者としての資質」に関連した学びの観点から読み、一つの学びが含まれる1文を抽出した。抽出したデータを、「看護学生の看護職者としての資質」の項目ごとに分類し分析した。分析内容の信頼性・妥当性を確保するため、共同研究者間の同意が得られるまで検討を繰り返した。

2) 「看護学生の看護職者としての資質」の調査票について（図1）

2004年7月に看護系大学1年生に実施した、「看護職者に必要な資質」の自由記述の内容分析を行い、得られた411のキーワードを、K-J法を用いて分類した。分類した411のキーワードを、技能性、情緒性、主体性、関係性の4つのカテゴリーに分類し、看護学教育のあり方に関する検討会報告書<sup>2,3)</sup>や看護師の資質に関する先行研究<sup>4)</sup>、看護職のイメージに関する先行研究<sup>5-7)</sup>、看護学教育の評価に関する文献<sup>3,8)</sup>などを参考にし、54の質問項目から構成された無記名自記式の調査票を作成した。

この調査票の回答は、学生の自己評価であり、学生の現在の到達度を学生自身の主観に基づいて評価した結果である。回答方法を自己評価にしたのは、自己評価が、自分自身の学業、行動、性格、態度などを評価

表 2 対象学生の基礎看護学実習 I 履修時のレディネス ( ) 内は単位数

	必修科目		選択科目	
	履修進行中	履修終了	履修進行中	履修終了
基礎分野	健康科学 (2) 生化学 (2) 英語 I (1) 心理学 (1) 社会生活と法律 (1)	日本語 I (1)	環境と生活 (2) 情報処理学 (2) 統計学 (2) 物理学 (2) 世界の保健医療 (2) 社会保障論 I (2) 人間学 (1) 人間関係論 (1)	ボランティア論 (1)
専門基礎分野	解剖生理学 (3) 保健学総論 (1) 医療保健学 I (1)			
専門分野	基礎看護の方法 I (1) 対象の理解 I (1) 看護の基礎 (2)			

基礎看護の方法 I：実習履修時の終了単元

- コミュニケーション
- 観察・情報収集・記録・報告
- バイタルサイン (体温・呼吸・脈拍・血圧)
- 環境 (基本ベッドの作成)
- 安全・安楽
- ボディメカニクス

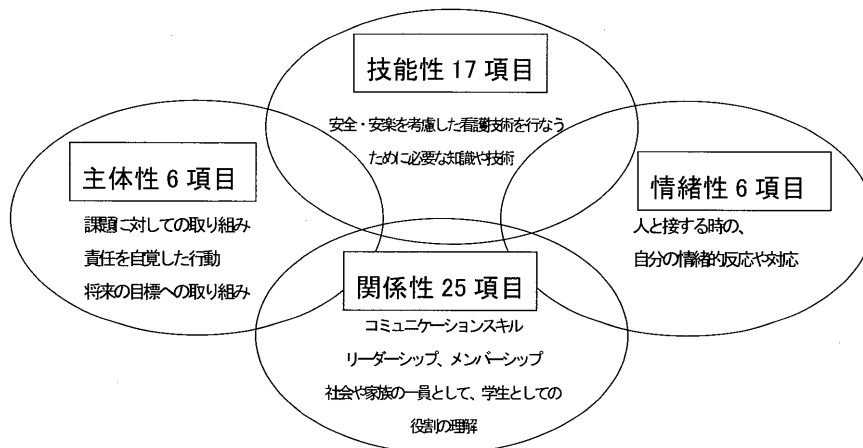


図 1 看護学生の看護職者としての資質の構成

し、そこから得た知見によって自らを確認し、今後の学習や行動を改善、調整する自発的、自律的な機能を持つ<sup>9)</sup>と考えたためである。

### 3. 倫理的配慮

本研究は、大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した。成績評価終了後に、本研究の趣旨と、研究への協力は自由意志であること、研究協力の有無と成績とは何ら関係がないこと、また研究以外にデータは使用しないこと、データは研究者によって厳重に保管し、

データ処理が終了次第処分することを口頭と書面で説明した。

レポートの匿名性を保護するため、次の手順でレポートを回収した。実習ファイル返却の際に原本のレポートとコピーしたレポートを返却し、研究に同意する場合は、コピーしたレポートの氏名記載部分を切り取り、封筒に入れて提出するようお願いした。同意の得られなかった場合には無記名の封筒のみを回収した。

## IV 結果

基礎看護学実習 I を履修した 1 年生 89 名中 57 名から、本研究への同意を得た。レポートの内容を分析した結果、153 個の学びが抽出された。それらの学びは、「看護学生の看護職者としての資質」の【技能性】、【情緒性】、【関係性】、【主体性】、【その他】の 5 個のカテゴリー、33 個のサブカテゴリーで構成されていた。（表 3）

文中では、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを [ ] の記号を用いて示した。

### 1. 【技能性】に関する学び

【技能性】のカテゴリーは、安全・安楽を考慮した看護技術を行うために必要な知識や技術に関連した学びである。実習履修時点での既習科目も限られており、バイタルサインの測定や環境整備等の技術に関連した学びであった。

[看護援助の目的を理解する], [看護援助を実施する前に十分説明を行う], [看護援助を実施する必要性を理解する], [看護援助実施後に報告する], [身体状況を考慮して看護援助を行う], [看護技術の原理原則に沿って行う], [プライバシーを考慮して看護援助を行う] の 7 個のサブカテゴリー、16 個の学びで構成された。

以下に代表的なサブカテゴリーとデータを示す。

[看護援助の目的を理解する]

実習の始めはバイタルサインの測定をすることで

精一杯になってしまった。次は患者様の身体のことばかりに気がいってしまい、環境のことが無関心になってしまった。徐々に観察ができるようになり、バイタルサインという生命の兆候を把握するために行う「観察」というのは、患者様の状態をよりよく知るための手段なのだということが分かった。

[看護援助を実施する前に十分説明を行う]

自分分かっていればそれでいいのではなく、患者さんが分かっていたら不安になり測定値も変わってしまうと思う。患者さん一人一人に合わせて、その人に分かりやすく説明することが大切である。

[看護援助実施後に報告する]

実習 2 日目の火曜日、患者のふらつきが強く、左側によく倒れてしまうという状況を私は認識が甘くただ単に眠いので横になっているだけだと思った。（異常に気づいた看護師の対応を後で聞き）自分の観察がいかに不十分であるかということ、観察した内容を担当の看護師の方に報告することの重要さがわかった。

### 2. 【情緒性】に関する学び

【情緒性】のカテゴリーは、人と接するときの、自らの情緒的反応や対応に関連した学びである。

[笑顔で明るく振舞う], [相手に自分の心を開く], [愛情を持って相手と接する], [相手から親しみをもたれるように意識する], [冷静に物事を考える] の 5

表 3 初回看護学実習で学んだ [看護学生の看護職者としての資質]

カテゴリー	サブカテゴリー：33 ( ) 学びの数
1. 技能性	看護援助の目的を理解する (5) 看護援助を実施する前に十分説明を行う (4) 看護援助を実施する必要性を理解する (2) 看護援助実施後に報告する (2) 身体状況を考慮して看護援助を行う (1) 看護技術の原理原則に沿って行う (1) プライバシーを考慮して看護援助を行う (1)
2. 情緒性	笑顔で明るく振舞う (6) 相手に自分の心を開く (6) 愛情を持って相手と接する (2) 相手から親しみをもたれるように意識する (2) 冷静に物事を考える (1)
3. 関係性	信頼関係を築く努力をする (18) 相手の立場に立って物事を考える (13) 相手に合わせたコミュニケーションを行う (13) 相手の話に共感を持って聴く (12) 相手に対しての気配りや配慮を行う (5) 表情や身振り手振りを使って相手に反応をする (5) 相手を尊重した態度 (5) 看護学生としての自分の役割を理解する (5) 相手に対する謙虚な気持ちを持つ (2) 相手が好感を持てるような対応をする (2) グループで共通の課題を見出す (1) グループメンバーと協調する (1) 相手を信頼する (1) 相手の価値やあるがままを受け入れて聴く (1)
4. 主体性	疑問や課題を発見し、解決に向けて取り組む (1)
5. その他	会話だけがコミュニケーションではない (9) 相手に関心を示す (7) 相手に安心感を与える (6) 一人ひとりに合わせたコミュニケーションをとる (6) 常に疑問を持つ (4) 患者に対する感謝の気持ちを持つ (3)

個のサブカテゴリー、17個の学びで構成された。

以下に代表的なサブカテゴリーとデータを示す。

[笑顔で明るく振舞う]

患者さんの肺の音を聴くため聴診をしたが、一人では音がきき取れず患者さんを不安にさせるような表情をしてしまった。そのとき患者さんの顔が変化したことが印象に残っている。自分の表情で患者さんを不安にさせてしまったのだと思った。

[相手に自分の心を開く]

自分の心を開いて話し、また患者さんの言葉に耳を傾け、相手に関心を持って接することによって相手に心を開いてもらえる。信頼関係を築くうえで最も重要なことだ。

[愛情を持って相手と接する]

「患者を理解する」ことは、「患者に心を開き、患者を好きになることで、患者の立場に立つ」ということだ。

[相手から親しみをもたれるよう意識する]

大きな声で挨拶もはっきり言うように心掛けた。担当の患者さんばかりでなく、他の患者さんにも笑顔で挨拶をした。

### 3. 【関係性】に関する学び

【関係性】に関する学びは、他者との関係性を持つためのコミュニケーションスキルや、組織で活動するために必要なリーダーシップやメンバーシップ、社会や家族の一員・学生としての役割に関連した学びである。実習目標・目的・評価も対象者とのコミュニケーションに重点を置いているため、抽出された学びが最も多いカテゴリーであった。

[信頼関係を築く努力をする]、[相手の立場に立って物事を考える]、[相手に合わせたコミュニケーションを行う]、[相手の話に共感を持って聴く]、[相手に対しての気配りや配慮を行う]、[表情や身振り手振りを使って相手に反応をする]、[相手を尊重した態度]、[看護学生としての自分の役割を理解する]、[相手に対する謙虚な気持ちを持つ]、[相手が好感を持てるような対応をする]、[グループで共通の課題を見出す]、[グループメンバーと協調する]、[相手を信頼する]、[相手の価値やあるがままを受け入れて聴く]の14個のサブカテゴリー、84個の学びで構成された。

以下に代表的なサブカテゴリーとデータを示す。

[信頼関係を築く努力をする]

話すタイミングが分からなかったり、話しかけても目線が合わなかったりし、なかなか話しかけられず、詰所でカルテを見ていることが多くなった。きっと、患者さんを避けて逃げていたのだと思う。そんな時に、師長さんに「たとえ目線が合っていないとしても、話しかけたら返事をしてくれるということはあなたの話を聞いていているということ。あなたが思っている会話のペース、方法が患者さんには合っていない。相手にペース、方法を合わせてみなさい。」とアドバイスをいただいた。自分がコミュニケーションについて相手のことを何も考えていなかったのだと気づいた。

[相手の立場に立って物事を考える]

私は会話中に患者さんを観察していて目に気力のないことが気になっていたので、患者さんの目がいきいきとするような援助を考えることにした。その援助を考える際、患者さんを自分におきかえて私だったらこの状況の中でどんな援助をしてほしいかと考え、まず実行したことは外に散歩に行き、気分転換をしていただくことだった。

[相手に合わせたコミュニケーションを行う]

一つ一つの動作をする前の「これからどうなるのか」の説明に対して、患者さんはわかりやすい表現にはうなずき、(血圧測定時の)「加圧・減圧」という難しい医療用語には表情が曇ったことから、患者さんは私たち看護師の説明・話を理解してくれていることが分かった。このことから患者さんに対してわかりやすい表現でコミュニケーションをとる必要性を学んだ。

[相手の話に共感を持って聴く]

バイタルサインの測定や、自分のことを知ってもらうことで一杯一杯で、実習最終日も実技的なことをしっかりこなすことに集中していた。すると患者さんがいきなり泣きだされた。「息子に迷惑をかけている」「糖尿病だから好きなものが食べられない」「足が自由にならない」そして最後に「生きているのがつらい」とおっしゃった。4日間私が一番そばにいて、いろんなことを話したり行動したりしていたのに何もわかっていなかったと感じた。しかし、

ただそばにいて話を最後まで聞き、辛いねって同感し、気持ちを受け止め、手を握り体をさする、そのようなことが患者さんの支えになるということを実感した。

[相手に対しての気配りや配慮を行う]

私は「コミュニケーション」とは話をして相手を知ることだと思っていたが、相手のことを思いやり考えながらするものがコミュニケーションであり、会話だけではなく絵を描いたり、手を動かしたり、表情で相手を理解したりと方法はいろいろあると思う。それが、患者さんに合うのか合わないのかを考えることが一番大切なのだと感じた。

[表情や身振り手振りを使って相手に反応をする]

言語を発さなくとも目線や表情でお互いに分かり合えれば、十分コミュニケーションを図れるということを学んだ。

[相手を尊重した態度]

病気の知識においてさらに人生の経験においても未熟な学生に看護される患者さんの気持ちを考えなければならないということ学んだ。

[看護学生としての自分の役割を理解する]

患者さんは、私たちの教科書である。患者さんの体を通して、私たちは学ばせていただいているのだから「ありがとう」という感謝の気持ちを忘れてはいけない。また、学んだことを次にいかすことが、患者さんへの一番の恩返しになるということ学んだ。

[相手に対する謙虚な気持ちを持つ]

コミュニケーションの大切さを直接患者さんから教えていただき、学ばせてもらった。これからどんな時も患者さんに対して、謙虚な心を忘れず、感謝の気持ちを持って接していきたい。

[相手が好感を持てるような対応をする]

話を聞いて共感したり笑顔で接するなど、患者さんが一緒に行っていやな気持ちにさせないように、表情や動作など小さな変化にも気づかなくてはいけないと思った。

[グループメンバーと協調する]

グループで力を合わせて励まし合い、お互いのよいところを吸収していった。

[相手の価値やあるがままを受け入れて聴く]

相手がなぜそう話すのか関心を持って聴くことが大切で、自分の主観的な意見は挟まずに患者の主張を尊重して肯定も否定もせず聴くことが大切だと学んだ。

#### 4. 【主体性】に関する学び

【主体性】のカテゴリーは、課題に対しての自己の取り組みや、責任を自覚した行動、将来の目標への取り組みに関連した学びである。

[疑問や課題を発見し、解決に向けて取り組む] の1個のサブカテゴリー、1個の学びで構成された。

[疑問や課題を発見し、解決に向けて取り組む]

どんなことにも理由があり、それには何かしら良い意味が込められている。この良い意味に気づくためにも、常に周りの状況を見て、疑問を持って学んでいくことが大切である。

#### 5. 【その他】に関する学び

【その他】のカテゴリーは、「看護学生の看護職者としての資質」の4個のカテゴリーに含まれない学びである。

[会話だけがコミュニケーションではない]、[相手に関心を示す]、[相手に安心感を与える]、[一人ひとりに合わせたコミュニケーションをとる]、[常に疑問を持つ]、[患者に対する感謝の気持ちを持つ] の6個のサブカテゴリー、35個の学びで構成された。

以下に代表的なサブカテゴリーとデータを示す。

[会話だけがコミュニケーションではない]

患者さんは話すことができないので、私は患者さんの意志が伝えられるように五十音の文字盤やイエスカノーで答えられる質問形式の文字盤を作った。これを4日目に患者さんに見せるととても反応が良く、口だけで私に何かを伝えようとしてくれるようになった。最終日の5日目には、口パクで何を私に伝えようとしているのかがわかるようになった。

[相手に関心を示す]

人とかかわりを深く考えてなく、コミュニケー

ションについて全くわかっていなかったが、相手に関心があるから、相手を知りたいために質問したり会話したりするのだとわかった。

[相手に安心感を与える]

痛みというのは患者本人しかわからないものである。痛みを訴えている患者に、安心感を与えることが重要だと思った。

[一人ひとりに合わせたコミュニケーションをとる]

その患者さん一人一人にあったコミュニケーションがあり、一人ひとりの特徴を知り、その人にあったコミュニケーションをとることが一番大切なんだと学んだ。

[常に疑問を持つ]

バイタルサインの測定やコミュニケーション、病床環境の整備などを行ってきたが、それそのものが大切なのではなく、そこから「何をどのようにすべきか、どうしてそのような援助をするのか」と、常に疑問を持って行動していくことが、一番看護師に求められるものだと学んだ。

[患者に対する感謝の気持ちを持つ]

毎日のカンファレンスの中で学んだことは、患者さんは、私たちの教科書であるということである。患者さんの体を通して、私たちは学ばせていただいているのだから「ありがとう」という感謝の気持ちを忘れず学んだことを次にいかすことが、私たちから患者さんへの一番の恩返しになるということ学んだ。

## V 考 察

### 1. 「看護学生の看護職者としての資質」に関連した学びの内容について

#### 1) 【技能性】の学びについて

基礎看護学実習Ⅰ履修時点での、基礎看護学の終了単元は、コミュニケーション、観察・情報収集・記録・報告、バイタルサイン、環境、安全・安楽、ボディメカニクスの6単元である。実習期間中実際に学生が実施した技術項目は、バイタルサインの測定、環境整備、基本ベッドの作成であり、抽出されたサブカテゴリーも、これらの技術項目を実施して学んだ内容であった。

サブカテゴリーのデータに、“実習の始めはバイタルサインの測定をすることで精一杯になってしまった。次は患者様の身体のことばかりに気がいってしまい、環境のことが無関心になってしまった〔看護援助の目的を理解する〕”、“自分が分かっていたらそれでいいのではなく、患者さんが分かっていたら不安になり測定値も変わってしまうと思う〔看護援助を実施する前に十分説明を行う〕”とある。これらのデータは、はじめは緊張しながらも無我夢中でバイタルサインの測定や環境の調整を行っていたが、少しずつ看護技術に自信が持て、看護師や教員の指導をもとに自分自身の行動を客観的に見られるようになり、得た学びであると考えられる。

また、“実習2日目の火曜日、患者のふらつきが強く、左側によく倒れてしまうという状況を私は認識が甘くただ単に眠いので横になっているだけだと思った。(異常に気づいた看護師の対応を後で聞き)自分の観察がいかにも不十分であるかということ、観察した内容を担当の看護師の方に報告することの重要さがわかった〔看護援助実施後に報告する〕”というデータがある。このデータの状況に看護師や教員の教育的介入があったかどうかをレポートから読み取ることはできなかった。しかし、学生が看護師の患者への対応をモデルとすることで、自身の行動を振り返り、観察や報告の意味を理解しているといえる。

#### 2) 【情緒性】の学びについて

カテゴリー〔笑顔で明るく振舞う〕のデータで“……聴診をしたが、一人では音がきき取れず患者さんを不安にさせるような表情をしてしまった。そのとき患者さんの顔が変化したことが印象に残っている。自分の表情で患者さんを不安にさせてしまったのだと思った”という記述がある。聴診をうまく行えなかったことで表出した学生自身の表情が、患者を不安にさせてしまったことを、患者の反応を通して振り返っている。

これらの、【情緒性】に関する学びは、受け持ち患者や、他の患者との相互的な関わりから得た学びであるといえる。藤岡<sup>10)</sup>らは、相互性とは、「見る」「見られる」や「与える」「受け取る」のように、関係の中にある者が、相互に同時に相手を経験しているということであると述べている。そしてこの相互性の経験を可能にする1つの理由として看護師が経験に開かれていることを挙げており、その時々「ひと・もの・こと」とともにあり、それらとともに変化することである<sup>10)</sup>と述べている。従って、【情緒性】



が患者との相互性の中から得る学びであるとするならば、学生自身の柔軟な姿勢や感性をもって、経験に開かれていることが重要であるといえよう。

### 3) 【関係性】の学びについて

レポートの内容を、「看護学生の看護職者としての資質」に関連した学びの観点から分析した結果、【関係性】のサブカテゴリーが最も多かった。基礎看護学実習Ⅰが、患者とのコミュニケーションを主とした実習であるため、他者との関係性を保つコミュニケーションスキルを含む【関係性】が最も多い結果となったと考える。

サブカテゴリー「信頼関係を築く努力をする」のデータで、学生が“話すタイミングが分からなかったり、話しかけても目線が合わなかったりし、なかなか話しかけられず、詰所でカルテを見ていることが多くなった”が、師長より“相手にベース、方法を合わせる”というアドバイスをうけ、“相手のことを何も考えていなかった”と自己中心的なコミュニケーションになってしまっていたことに気づいている。コミュニケーションは送り手と受け手との相互作用の中で、意味を理解し互いに信頼関係を築き深めあうという変化プロセスである<sup>11)</sup>というコミュニケーションの本来の意味を、臨床の状況の中から理解しているといえよう。

サブカテゴリー「相手の話に共感を持って聴く」のデータで、“患者さんがいきなり泣きだされた。「息子に迷惑をかけている」「糖尿病だから好きなものが食べられない」「足が自由にならない」そして最後に「生きているのがつらい」と訴えられ、“4日間私が一番そばにいて、いろんなことを話したり行動したりしていたのに何もわかっていなかったと感じた。しかし、ただそばにいて話を最後まで聞き、辛いねって同感し、気持を受け止め、手を握り体をさする、そのようなことが患者さんの支えになるということを実感した”，と振り返っている。4日間の実習の中で自らの課題をこなすことに集中していた学生が、患者の言動により、自らのこれまでの関わりを振り返り、患者の痛み・苦しみを理解できていなかったと反省している。そして、苦悩する患者のまるごとを受け止め、患者に寄り添い理解することの大切を学んでいる。共感性について、中西<sup>12)</sup>は、他者の内的世界の現実を自己の現実として感ずる能力であり、他者の痛み（肉体的なそれとは限らない）に対する鋭敏さであると述べている。つまり、看護職者自身の共感性が他者の言葉や動きの意味を把握して、適切に看護援助として行為していくことが共感性であるともいえる。共感性は患者と看護

者の関係成立の基本である。1年次7月という早期の実習にもかかわらず、学生は援助的人間関係の構築において大変重要な学びを得ていることがわかった。

コミュニケーションスキルだけでなく、[相手を尊重した態度] や [相手に対する謙虚な気持ちを持つ] ことを学んでいた。さらに、“病気の知識においてさらに人生の経験においても未熟な学生に看護される患者さんの気持ちを考えなければならない、患者さんは、私たちの教科書である。患者さんの体を通して、私たちは学ばせていただいているのだから「ありがとう」という感謝の気持ちを忘れてはいけない”ということを学んでいた。これらは、患者への感謝の気持ちから、看護学生として、学習者としての立場を再確認している。また、“学んだことを次にいかすことが、患者さんへの一番の恩返しになるということを学んだ”、“コミュニケーションの大切さを直接患者さんから教えていただき、学ばせてもらった。これからどんな時も患者さんに対して、謙虚な心を忘れず、感謝の気持ちを持って接していきたい”と述べているように、看護を学ぶ意味をも見出している。このことは、今後看護を学んでいく学生の、学習の動機づけにも繋がっているといえよう。

### 4) 【主体性】の学びについて

【主体性】は、課題に対しての自己の取り組みや、責任を自覚した行動、将来の目標への取り組みに関連した項目である。従って、学びを深め、自らの課題を明らかにすることによって得ることができる学びであるといえる。一部の学生の中には、実習での学びを自己に引き付け、今後の課題へと発展させることができた学生もいた。

### 5) 【その他】のカテゴリーに含まれる学びについて

【その他】のカテゴリーは、「看護学生の看護職者としての資質」の4つのカテゴリーに含まれない学びである。

本実習の実習施設は療養病棟や精神科病棟を含んでいるため、学生は言語的コミュニケーションが十分にとることのできない患者を受け持つこともあった。そのため、[会話だけがコミュニケーションではない]、[一人ひとりに合わせたコミュニケーションをとる]などのサブカテゴリーが抽出されたと考えられる。

また、[常に疑問を持つ]のデータに、“バイタルサインの測定やコミュニケーション、病床環境の整備などを行ってきたが、それぞれのもので大切なのではなく、そこから「何をどのようにすべきか、どうしてそのような援助をするのか」と、常に疑問を持って行動して

いくことが、一番看護師に求められるものなのだと学んだ。”という学びがあった。これらは【技能性】に関わらず、看護師の行動すべてに何らかの意味があるということを理解しているのであろう。藤岡<sup>13)</sup>らは、看護や看護教育がそのような「知」の組み換えの動向に対し、自覚的であるかということ必ずしもそうとは言えない。臨床の経験を看護学生自らが意味づけながら、経験そのものを深化発展させていくプロセスの中で、臨床の知としての看護技術が獲得される、そのプロセスを支援するのが臨床実習教育である、と述べている。従って、学生自身が無自覚に通り過ぎてしまうような、患者との関わりで感じた違和感や疑問に、教員が関わることによって、経験に内在した臨床の「知」の意味づけが可能となるのではないだろうか。

## 2. 「看護学生の看護職者としての資質」に関連した学びと早期体験学習について

早期体験学習の意義を、桜井、山口<sup>14)</sup>は、看護職に魅力を感じ、専門的知識・技術はもちろんのこと、多くの様々な経験から豊かな人間性を形成することの必要性を認識し、これらが学習意欲へと繋がっていると述べている。また、効果として、看護職や対象者に直接触れることから、講義では得られない自分たちの体験や観察と感性を通して学ぶことの大切さを実感した<sup>14)</sup>と報告している。我々は、看護基礎教育の早期に初回基礎看護学実習を行うことは、学生の看護を学ぶ動機づけとして大きな意味を持つと考え実施してきた。そして結果から、【関係性】のカテゴリーに、看護を学ぶ動機付けの基盤となる、豊かな人間性を形成することの必要性<sup>14)</sup>に関する学びを読み取ることができた。看護学実習では、学生、患者、指導者、教員、他の医療従事者、患者の家族、実習グループの学生など、多くの人々と関わることを必然とし、普段の教室での学習スタイルからは想像を超える人間関係が展開されることが多い。実習という教育の場で、学生は、多くの他者と関わる中で常に自分と向き合うことを求められ、自己洞察を深めることを要求される場面も少なくない。基礎看護学実習 I のレポートの【関係性】に関する学びは、初めて看護という職業に触れ、その現場に身を置きながら体験することによって得た学びである。一人の受け持ち患者を理解するために、その患者や、患者を取り巻く多くの他者と関わることで、自らの【関係性】のありようを振り返る機会となっていた。このことは、他者との関係性が希薄といわれている世代の学生にとって、看護職に必要な人間性を形成するため

の学習の機会として、そして看護を学ぶ早期の段階に初回基礎看護学実習を実施したという点においても有効であったと考える。

最後に、本研究の研究対象である課題レポートは、基礎看護学実習 I の実習目的・目標・行動目標に照らし合わせながら、実習中に学んだ中でテーマをあげ、学びの内容・評価・考察・まとめ等を記載したものである。学生が多くの学びをしていたとしても、学生自身が一番印象深い学びに絞って記載したものであるため、学びの数は実際の学びと比例するものではない。しかし、【関係性】の学びが多かったということは、それが、学生にとって一番印象深い学びであったということは言えるのではないか。

## VI 結 論

1. 「看護学生の看護職者としての資質」に関連した学びの内容について分析した結果、【技能性】、【情緒性】、【関係性】、【主体性】、【その他】の5個のカテゴリー、33個のサブカテゴリーで構成された。
2. 「看護学生の看護職者としての資質」に関連した学びの内容
  - 1) 【技能性】についての学びは、実際に学生が実施した技術項目である、バイタルサインの測定、環境整備、基本ベッドの作成を実施したことから得た学びであった。
  - 2) 【情緒性】についての学びは、受け持ち患者や他の患者との相互的な関わりから得た学びであった。
  - 3) 【関係性】についての学びが最も多かった。1年次7月という早期の実習にもかかわらず、学生は共感性などの援助的人間関係の構築において大変重要な学びを得ていることがわかった。また、コミュニケーションスキルだけでなく、[相手を尊重した態度] や [相手に対する謙虚な気持ちを持つ] ことを学んでいた。
  - 4) 【主体性】について、一部の学生の中には、実習での学びを自己に引き付け、今後の課題へと発展させることが出来た学生もいた。
  - 5) 【その他】は、実習施設の特徴を表した学びがあった。

3. 「看護学生の看護職者としての資質」に関連した  
学びと早期体験学習について

初めて看護という職業に触れ、その現場に身を置きながら体験することによって得た学びであるため、自らの関係性のありようを振り返る機会となったことが、【関係性】に関する学びが圧倒的に多かった一つの要因であることが示唆された。

謝 辞

本研究を行うにあたり、調査を快く受けてご協力頂きました学生の皆様に心からお礼と感謝を申し上げます。

本論文の要旨は日本看護学教育学会第17回学術集会（福岡）において報告した。

文 献

- 1) 辻野朋美, 上野範子, 緒方巧, 山口智子, 矢野正子. 看護学生の看護職者としての資質に関する研究. 藍野学院紀要 2005; 19: 80-8.
- 2) 看護学教育の在り方に関する検討会 報告: 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて. 平成14年3月26日
- 3) 看護学教育の在り方に関する検討会 報告: 看護実践能力育成に充実に向けた大学卒業時の到達目標. 平成16年3月26日
- 4) 河津芳子, 任和子. 看護婦に求められる資質 —— 一般人, 医師, 看護婦, 看護教師への意識調査を踏まえて ——. 日本看護医療学会雑誌 2000; 2 (1): 9-15.
- 5) 米田昌代, 佐々木栄子, 滝内隆子, 小松妙子, 中山栄純, 天津栄子. 看護大学生の看護職イメージに関する研究 [第1報] —— I大第1回生1年次に焦点を当てて ——. 看護展望 2003; 28 (10): 86-91.
- 6) 米田昌代, 佐々木栄子, 中山栄純, 金若美幸, 田村幸恵, 滝内隆子, 小松妙子, 川島和代, 天津栄子. 看護大学生の看護職イメージに関する研究 [第2報] —— 自己効力感との関連に焦点を当てて ——. 看護展望 2003; 28 (10): 92-8.
- 7) 真鍋淳子, 野尻雅美, 中野正孝, 桂敏樹, 酒井郁子: 看護学生の看護婦イメージ 大学生と短大生の比較. 看護教育 1994; 35 (6): 427-33.
- 8) 田島柱子. 看護教育評価の基礎と実際. 東京. 医学書院; 1989
- 9) 舟島なをみ, 杉森みど里. 看護学教育評価論. 東京. 文光堂; 2000. p. 11-2.
- 10) 藤岡完治, 安酸史子, 村島さい子, 中津川順子. 学生とともに創る臨床実習指導ワークブック第2版. 東京. 医学書院; 2001. p. 49-50.
- 11) 塚原節子, 吉井美穂, 坪田恵子. 臨地実習前ロールプレイングで高めるコミュニケーション力 —— 看護師・患者・観察者役になった学生の気づき ——. 看護展望 2005; 30 (12): 21-6.
- 12) 中西睦子. 臨床教育論. 東京. ゆみる出版; 1985. p. 49
- 13) 前掲 10) p. 3
- 14) 桜井礼子, 山口真由美. 看護教育における初期体験実習の経験と意義. 大分看護科学研究 1999; 1 (1): 20-6.